



Title	ぼかしの「も」の呼応について
Author(s)	榎原, 実香
Citation	間谷論集. 2018, 12, p. 187-198
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89853
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

＜研究ノート＞

ほかしの「も」の呼応について

榎原 実香

1. はじめに

日本語の「も」には(1)のような「太郎」以外の存在を表す累加の「も」の他、(2)のような並列事態が想定されにくい(中尾 2008)ほかしの「も」¹が存在する。

(1) 花子が帰宅しました。太郎も帰宅しました。

(2) 太郎はもう大学生かあ。太郎も大人になったねえ。

現代日本語のほかしの「も」は、累加の「も」とは異なり好まれる文末形式があることが指摘されている。(3)のように終助詞が現れない場合、「も」はほかしの「も」として解釈されにくくなる。本稿では、現代日本語のほかしの「も」の文末呼応について生成文法の観点から考察する。

(3) お前も懲りない# (なあ)。²

2. 先行研究

2-1. カートグラフィー

本稿では、文の階層構造から「も」の統語的な性質を分析する。南(1974, 1993)は文の構造について、文をA～Dの段階に分け、Aの従属節がBの節の中に、Bの従属節がCの節の中に収まるという包含関係にあることを示している。

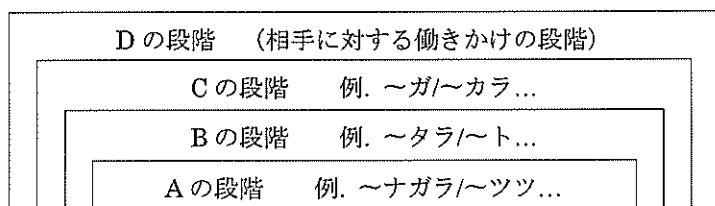


図1 南による文の階層構造

Luigi Rizzi 等によるカートグラフィー研究において詳細に記述された CP 層は、南の階層構造では C、D の段階に対応し、より詳細な統語関係を分析することができるようになった。カートグラフィーの枠組みで日本語の文中要素の生起について検討したものは三原(2012)、遠藤(2014) 等多く見られるが、先行研究より、主な階層と生起する要素、南による階層構造との対応関係の概観を図2に示す。

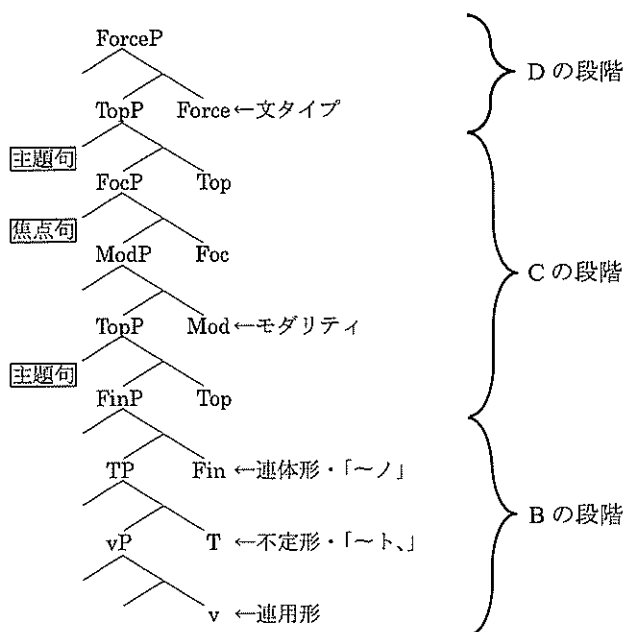


図2 日本語の階層構造

ForceP は文タイプを決める範疇であり、D の段階に対応するものであると考える。また、上位の TopP (主題の階層) から下位の TopP まではテンスが自由に選択できる階層であり、C 類従属節にあたるカラ節、ガ節などもこの階層で生成されるものであると考える。それ以下の階層は、連体形や連用形など、テンスの選択が制限される、いわゆる B の「判断」段階である。

2-2. 係り結びと一致

古典語では、係り結びは「も」のような係助詞が陳述に影響を及ぼし、文末の形式(動詞の活用形)を選択する現象であるが、長谷川(2012)は、ト節による文タイプの選択が現代版の係り結びであるとしており、係り結びに類似した文末呼応が現代日本語にも存在することを指摘している。

(4) a. 窓を開けると雪が見える。

b. # 太郎が来ると会いますか? (長谷川 2012 : 34 より抜粋)

長谷川(2012)によれば、係り結びは、統語的には CP 層における一致現象であり、文タイプが選択されるような構文は、ForceP において指定部・主要部の一致(spec-head agreement)が生じているとみなすことができる。

(5) CP レベルでの「一致」現象 (いわゆる「係り結び」)

主要部 A (結び・述語形態・終助詞) の素性が、下位構造に「一致」する素性を持つ要素 B を指定(要求)し、その素性を持つ要素と局所的関係に入り、文の特定の意味解釈・語用機能を可能とする現象。

(長谷川 2012 : 31-32 脚注より)

現代日本語のぼかしの「も」にも古典語の係り結びの性質が残っているとすれば、CP 層において主要部・指定部の一致が生じることが予想される。

3. ぼかしの「も」の統語構造

ぼかしの「も」の属する階層について、三井(2001)は、ぼかしの「も」が主題の「は」と同じく逆接のガ節といったC類従属節内に生起可能であることから、Cの段階に属する要素であるとしている。

(6) お前も大きくなったが、性格は変わらないな。

また、野田(1995)はぼかしの「も」が特定の聞き手にたいするムードと呼応することを主張している。以下のように、疑問文や命令文ではぼかしの「も」として解釈されにくいことから、ぼかしの「も」は聞き手にたいするムードを選択するDの階層で働くと考えられる。

(7) #息子さんも大きくなりましたか？

(8) #おまえも大きくなれ。 (野田 1995 : 23 より、#は筆者による)

以上から、ぼかしの「も」句はCの段階の範疇で生起しながらそれよりも高いDの段階の文タイプと呼応することがわかる。次節より、ぼかしの「も」が含まれる階層と一致の生じる階層についてカートグラフィーの枠組みで論じる。

4. 分析

4-1. ぼかしの「も」の生起

まず、ぼかしの「も」と各範疇の要素との共起関係についてカートグラフィー研究の観点から表1のように整理すると、連体形の節(FinP)以下の階層では「も」は累加の「も」としてしか解釈されないことがわかる。すなわち、ぼかしの「も」がFinPより上の階層で基底生成されることが予想される。

表1 ぼかしの「も」の生起範疇

範疇	要素	例文
TopP	主題句	うちは、太郎 <u>も</u> 大人になってやっと落ち着きました。
FinP	連体形	#[息子 <u>も</u> 大人になった]田中さんがここで暮らしている。
TP	と	#太郎 <u>も</u> 大人になると、身長が伸びるだろう。
vP	連用形	#太郎 <u>も</u> 大人になり <u>そう</u> で、みんな安心している。

4-2. ぼかしの「も」と呼応する素性

FinP より上位に位置すると考えられる要素とぼかしの「も」との共起関係について、さらに詳細に検討する。モダリティは、カートグラフィーの枠組みでは ModP³ もしくはそれより上の階層に生起し、命題に対する話し手の判断など文の述べ方を担う（日本語記述文法研究会編 2003 等）ものであるが、以下のよう

にぼかしの「も」はあらゆるモダリティと共起することができる。

- (9) a. もう社会人なのだから、太郎も大人になった方がいい。 (評価)
 b. いろんなことを経験して、太郎も大人になったようだ。 (認識)
 c. こうして、太郎も大人になったのだ。 (説明)
 d. 太郎も大人になったよねえ。 (伝達)

しかし、表2のように表現類型のモダリティに基づくと、ぼかしの「も」に共起の制限が見られることがわかる。表現類型のモダリティとは、「伝達的な機能の表し分け」という、文の基本的な性質を決めるもの（日本語記述文法研究会編 2003：15）」であり、文タイプを指定する Force に相当するものであると考えられる。

表2 表現類型のモダリティとぼかしの「も」との共起

モダリティ		要素	例文
表現類型	情報系	叙述	(平叙文) 太郎 <u>も</u> 大人になった。
		疑問	か # 太郎 <u>も</u> 大人になりました <u>か</u> ?
	行為系	意志	しよう <u>と</u> わたし <u>も</u> 大人になろう <u>と</u> 。
		勧誘	しよう # 太郎 <u>も</u> 大人になろう <u>。</u>
		行為要求	てください # 太郎 <u>も</u> 大人にな <u>って</u> ください <u>。</u>
		感嘆	なんて ?? <u>なんて</u> 太郎 <u>も</u> 大人なんだろう!

表2より、ぼかしの「も」は、疑問、勧誘、行為要求など、聞き手を必要とする文とは共起が難しいことから、相手に対する働きかけを担うDの段階で働くことがわかる。さらに、「か」は話し手が情報をもっていないこと、「よ」は聞き手がもっていない情報を話し手が提供すること示す要素であるが、以下のように下降調で発話されると、「か」は納得、「よ」は状況把握を意味し、同音の要素であっても話し手・聞き手間の情報の格差を前提としない文であれば、ぼかしの「も」の生起が可能である。よって、ぼかしの「も」として機能するには、話し手と聞き手のもつ情報が共有されていることが必要だと考えることができる。

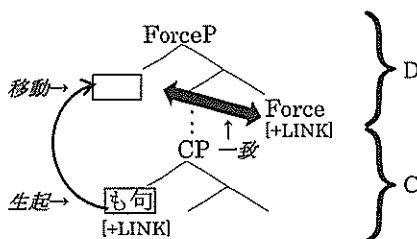
- (10) a. # 太郎も大人になったか?
 b. 太郎も大人になったか。(下降調) 時が経つのは早いもんだな。
- (11) a. # 違うよ、太郎も大人だよ。
 b. 太郎も大人だよ。(下降調) しっかりしていて、感心するなあ。

5. ぼかしの「も」句の一致

上記のような呼応は、情報の関連付けにかかわる[± LINK]素性の一致とみなすことができる。Vallduví(1994)等によれば、「LINK」は、情報理解の過程で話し手や聞き手をもつ既知情報に、発せられた命題を結びつける性質のことである。中尾(2008)によると、ぼかしの「も」によって文が「感慨」や「感応」といった「情意」を帯びるが、「情意」とは、ある情報や解釈が、それぞれ一般則

や他の可能な解釈に「累加」されることで生じるものであると考えられる。ほかしの「も」が命題を既知情報と関連付ける性質（[+LINK]）をもつとすれば、文タイプを決める Force 主要部の [+LINK] 素性と一致し、疑問など既知情報と関連付けられない（[-LINK]）要素とは一致しないと考えることができる。本稿でも指定部・主要部の一致を支持すると、ほかしの「も」句は局所的な一致のために C の段階から D の段階である ForceP の指定部へ移動すると考えられる。

図3 ほかしの「も」句の統語派生



6. ほかしの「も」の累加性

最後に、ほかしの「も」の累加性についても統語的な観点から考察する。(12)のような累加の「も」の場合、「も」が「太郎」に付加することによって太郎の他に「プリンを買った」人（＝花子）がいることを表すことができるが、以下のように主語の「花子」や「太郎」に焦点がある場合、それらに「も」が直接併合（merge）しなければならないことがわかっている。

(12) 〈花子は〉プリンを買った。〈太郎も〉プリンを買った。

(13) 〈花子が〉プリンを買った。# 〈太郎は〉プリンも買った。

ほかしの「も」は、中尾(2008)に従えば、①一般則に則った他の同類の命題や、②事態に対する他の同類の解釈を想定させることができるという点で累加性をもつ。(14)の場合、「も」によって①「人が成長する」といった一般則から「息子が小学生になる」といった命題や、②「太郎が一人前に仕事をこなす様子」

を見て発話された場合には、「太郎が立派になった」といった解釈が想定される。

(14) 〈太郎も大人になった〉な。

①「人は成長するものだという一般則」〈息子が小学生になる〉

②「太郎の振る舞いにもとづく解釈」〈太郎が立派になった〉

このように、ぼかしの「も」による累加性は、統語的には「も」が併合した要素のみではなく、命題・解釈といった「文 (CP)」にかかることがわかる。これは、累加の「も」では「焦点の拡張 (propagation of focus) (青柳 2006 等)」や「後方移動焦点 (沼田 2009 等)」と呼ばれる、「も」の意味作用が「も」の直接併合した要素を越えて適用される現象と類似している。

(15) a. あの医者は、〈腕もいい〉が、〈料金も高い〉。 (沼田 2009 : 69)

b. 〈太郎も専門学校を卒業し〉、〈花子も就職が決まった〉。

以下の (17a) がぼかしの「も」として解釈されにくくなることから、累加の「も」は併合した要素に直接焦点がおかれ、その要素の他者を指定する機能があるのに対し、ぼかしの「も」は句として CP の指定部に生成され、さらに ForceP へ移動するため、「も」句による累加性が、その併合対象である文 (CP) に義務的にかかるということが考えられる。よって、ぼかしの「も」は、「焦点の拡張」が義務的であるという点で累加の「も」と異なると言える。

(16) a. 〈花子が〉年をとった。〈太郎も〉年をとった。 (累加)

b. 〈花子が大学生になった〉。〈太郎も年をとった〉。

(17) a. 〈太郎が〉年をとったねえ。# 〈次郎も〉年をとったねえ。 (ぼかし)

b. 〈月日の流れは早い〉ねえ。〈次郎も年をとった〉ねえ。

7. まとめ

ほかしの「も」句に関して以下のような点が明らかとなった。

- ①ほかしの「も」句は CP 層（C の段階）の指定部に生成される。
- ②ほかしの「も」句はその後 ForceP（D の段階）の指定部へ移動し、[+LINK] 素性をもつ Force 主要部と一致して文タイプを選択する。
- ③ ForceP に移動したほかしの「も」は「焦点の拡張」が義務的に生じる。

以上の分析は、対比性の薄まる主題の「は」など、ほかしの「も」以外にも適用できることが予想される。今後は、情報の関連付け素性（[± LINK]）の統語機能、ForceP と情報構造との関連性、ほかしの「も」が ForceP に移動する動機、焦点が義務的に拡張する要因など未だ明らかになっていない点について、本稿で扱ったデータからさらに理論的な考察を進めていきたい。

注

- 1 このような「も」は詠嘆（田野村 1991）や柔らげの「も」（野田 1995, 沼田 1986 等）などとも呼ばれるが、本稿では、「も」の累加性が顕在的ではないという点に着目し、ほかしの「も」と呼ぶ。
- 2 「#」は、非文ではないが、ある要素が意図された意味では解釈されない文を示す。本稿では、主に累加の「も」としては解釈されるがほかしの「も」としては解釈されないものに「#」を付記している。
- 3 井上(2011)では、ModP には時制の分化がなく、文中に一つしか現れず、また否定形の出現も制限されている発話行為の真正モデルのみが生起するとされているが、これらの条件がすべてのモダリティに当てはまるかどうかについては議論の余地がある。

参考文献

- 青柳宏(2006) 『日本語の助詞と機能範疇』 ひつじ書房
- 井上和子(2011) 「モデルをめぐって」 長谷川信子編『70年代生成文法再認識：日本語研究の地平』 開拓社 pp.1-36
- 遠藤喜雄(2010) 「終助詞のカートグラフィー」 長谷川信子編『統語論の新展開と日本語研究：命題を超えて』 開拓社 pp.67-94
- 遠藤喜雄(2014) 『日本語カートグラフィー序説』 くろしお出版
- 田野村忠温(1991) 『も』の一用法についての覚書ー『君もしつこいな』という言い方の位置付けー『日本語学』第10巻第9号 pp.80-86
- 中尾有岐(2008) 「並列事態が想定しにくいモについて」『日本語文法』第8巻1号 pp.36-52
- 日本語記述文法研究会編(2003) 『現代日本語文法4 第8部モダリティ』 くろしお出版
- 沼田善子(1986) 「第2章とりたて詞」 奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』 凡人社 pp.105-225
- 沼田善子(2009) 『現代日本語とりたて詞の研究』 ひつじ書房
- 野田尚史(1995) 「文の階層構造からみた主題ととりたて」 益岡隆志・野田尚史・沼田善子編『日本語の主題と取り立て』 くろしお出版 pp.1-35
- 長谷川信子(2012) 「現代版『係り結び』としてのト条件節構文ーCP構造における従属節と主節の呼応ー」『日本語文法』第12巻2号 pp.24-42
- 藤平愛美(2015) 「日本語の『ハ』句の分析ーカートグラフィーの観点からー」 大阪大学修士論文
- 益岡隆志(1991) 『モダリティの文法』 くろしお出版
- 三井正孝(2001) 「モノの〈提題〉性：現代日本語の場合」『日本語と日本文学』第32号 pp.65-79
- 南不二男(1974) 『現代日本語の構造』 大修館書店
- 南不二男(1993) 『現代日本語文法の輪郭』 大修館書店
- 三原健一(2012) 「活用形から見る日本語の条件節」 三原健一・仁田義雄編『活用論の前線』 くろしお出版 pp.115-151
- 山田孝雄(1936) 『日本文法概論』 寶文館

- Rizzi, Luigi (1997) "The fine structure of the left periphery," Liliane Haegeman ed., *Elements of Grammar*. Dordrecht: Kluwer, pp.281-337
- Rizzi, Luigi (2004) "Locality and left periphery," Adriana Belletti ed., *Structures and Beyond*. New York: Oxford University Press, pp.223-251
- Vallduví, Enric (1994) "Structural properties of information packaging in Catalan," Katalin É. Kiss ed., *Discourse Configurational Languages*. New York: Oxford University Press, pp.122-152

〈キーワード〉 ほかしの「も」 カートグラフィー 一致 係り結び

エバラ ミカ (大阪大学大学院生)

On the Concord of Non-Additive *Mo*

EBARA Mika

This article examines the syntactic aspect of the particle *mo*, which allows for cases where *mo* does not link parallel events (also known as non-additive *mo* or *bokashi-no mo*). In old Japanese, *mo* selects a form of verb, which is called *kakari-musubi*. Similarly, in modern Japanese, non-additive *mo* selects the sentence type. I argue that non-additive *mo* phrases are generated higher than the FinP, which belongs to B level within the hierarchical structure of a sentence (Minami 1974, 1993), and that they concord with the sentence type in ForceP, which belongs to D level. According to Hasegawa (2012), the *kakari-musubi* shows some similarity to a CP level spec-head agreement. I also argue that non-additive *mo* phrases move from the specifier of CP (C level) to the specifier of ForceP, and agree with the [+LINK] feature of Force head. As a result, while additive *mo* expands its focus only optionally, non-additive *mo* expands its focus obligatorily, which causes a difference between additive *mo* and non-additive *mo*.